

カンボジア研修風景

日本ユネスコ協会連盟 (NFUAJ) ★

識字教室・図書館・幼稚園・音楽クラス・職業訓練など活動が様々な分野にわたり、地域への教育活動の必要性がどれだけ大きいかを学ぶことができた。まず地域住民の理解を広げ、コミュニティー・ラーニング・センターを住民と共に立ち上げること、そしてスタッフが地域に住み、共に活動を進めていくこと、ただ与えられた学校と自分たちでつくる学校とは違うことに少し似ている気がする。住民達が本当に納得し、自ら求め活動する事なくしては何事も成し遂げられないことに支援の基本を見た。



★ シェムリアップ

トンレサップ湖



チェンエク/ストウミンチェイ ゴミ山 ●

ゴミ山を職場として生活している人も存在し、雇用問題や、衛生教育、人権意識、格差社会など、ここには、社会問題が凝縮されている。石油加工製品等の輸入とこれまでの生活習慣にずれがあり、新しいゴミの処理方法が定着する前に、新しい製品が先進国から入ってきている。製品の輸入にはその処理方法も一緒に導入されることが必須であると強く思う。途上国は先進国のゴミ箱になってはいけないと思った。

CPCDO孤児院 ●

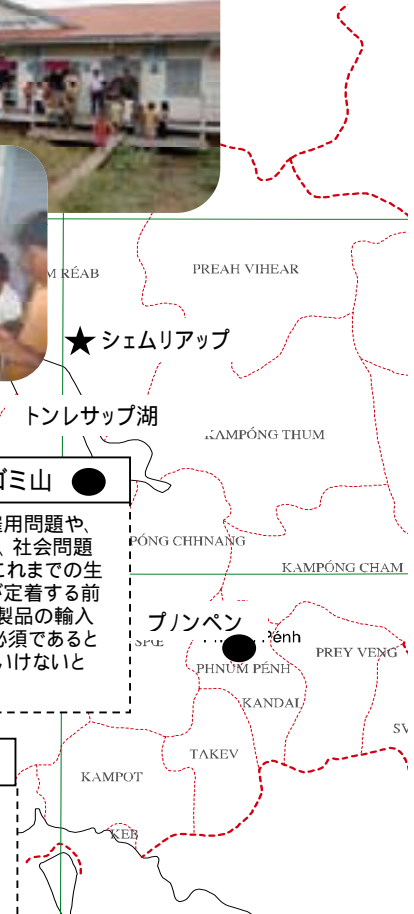
孤児が生活をしながら共同生活をしている。孤児ということ聞いて少し心配もしていたが、明るい表情や、人懐っこさに驚いた。それぞれが描いた色とりどりの絵を最後に贈られ、その絵の明るさに子どもの未来もそうであることを願った。



シャンティ国際ボランティア会 (SVA) ●

スラムでの移動図書館の事業だけでなく、学校建設やワークショップを開くなど幅広く活動されているNGOであることがわかった。「共に生き、共に学ぶ」を活動のテーマにしている。学校建設をしても、教師不足で使われないこともある。故にハード面より、ソフト面での支援に力を入れている点に「必要なところに支援を行っている」印象を持った。格差社会の中、スラム出身の職員ステラさんが子どもたちに本を読む姿が印象的だった。身を乗り出す子どもたちを見て、本好きはどの国も同じなのだと思った。また、カンボジア国内には本が少ないので、日本で寄付された絵本にクメール語のシールを貼られたものも読まれていた。子どもにとって本は身近であり、学級でも参加できそうな取り組みだと感じた。

は参加者の感想です。





クメール伝統織物研究所 (IKKT) ★

ここでも内戦の傷跡を見た。アンコール時代から伝わるクメール織りの伝統も内戦で分断された。技術は人から人へ伝えられていくものであるが、ここでは伝統織物の技術を身につけてもらうだけでなく、貧しい生活をしている女性たちに働く場を提供し、またその子供たちに技術を受け継がせていくために活動している。クメール織りに関して知識がなかったが、2百年～3百年前後のものが一番軽くて使いやすいと聞き、その品質や技術の高さに驚いた。

RATANAKKIRI

カンボジア日本友好学園 ▲

日本に難民として移り、18年住んでいたというコンボンさんが母国の教育を取り戻そうと活動。設立された学校で、子どもたちは、きらきらした顔で待っていた。「日本の援助に感謝の気持ちをもっている、だから将来は日本に行って日本のために働く。」と話す子どもがいて、少し驚いた。日本の子どもたちは、自分の教育について感謝することはあまりないだろう。私自身が、受けてくることのできた教育に、まずは感謝しなくてはいけないと思った。この子どもたちが日本に来たとき、日本はどのように受け入れるのだろう。日本で私にやれる方法の一つが、開発教育なのだと感じる事ができた。



「カンボジア人として、カンボジアのために汗をかいている。自分や家族のためではなく、カンボジアの貧しい子どものために財産を使っている」というコンボンさんの言葉がいまでも脳裏に残っている。

VIETNAM

▶▶▶ プレイヴェーン

◆ スヴァイリエン



日本地雷処理を支援する会 (JMAS) ◆

月に約1000発もの数を処理していることに驚いた。爆発事故は少ないが、大半が鉄屑を集めるゴミピッカーが起こすものであり、ここにも、貧困の影響があった。内戦後30年近く経っているのに、まだたくさん不発弾や地雷が残っていることに胸が痛む。子どもが発見することが多く、ノートやポスターを配布して啓発活動を進め、事故を無くす努力をしていた。JMASの活動がカンボジアの人々の暮らしに安心を与えている。一日も早く、子どもたちが田畑を自由に走り回れるようになってほしいと思った。



国際ボランティアセンター山形 (IVY) ◆

女性たちが、自分達の仕事に責任を持ち、生き生きと取り組んでいる姿に感動しました。IVYが入る前までは、内戦の影響で、近所の人達とも話をしなかったそうです。チューティル地区の農業での収入は非常に低く、半数以上の家庭が出稼ぎに行っています。そこで残った女性達が、組合を形成し、野菜栽培の知識・技術を学び、販売まで組織的に行っています。IVYは、このシステムの確立と組織の自立発展性を強める活動をしています。収益を向上させるだけでなく、世帯間の協力(コミュニティーの形成)、女性の地位向上、自信と生きがいなど幅広く貢献していて、大変素晴らしい取り組みをしていると感心しました。

